
月夜の詩

星野タクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の詩

【Nコード】

N3169V

【作者名】

星野タクト

【あらすじ】

逢魔が時、異世界にさまよいこんでしまった少年、譬。言葉も通じず、居場所もない彼を拾ったのは、村娘のサシェだった。異世界トリッパーと天然村娘のほのぼのストーリーです。前半のシリアス注意。恋愛タグはついてますが現在ものすごく薄いです。

それはちょうど、塾の帰り道だった。

特に何も考えずにぶらぶらと、日の暮れた道を歩く。もともと人通りの少ない道の為、人影はまったくなかった。

（それにしても、今日はさすがに遅れすぎたな……）

ここ最近の下校時間であれば、日が暮れる前には家に着くことができる。暗い夜道は見慣れていない分、まるで知らない場所のような気がした。

暗闇に恐怖は感じない。もともと神経が図太いのか、危機感がないだけなのか、たとえばくらい夜道でも逆にものめずらしさに心が浮き立つ性質だ。

だが、数回角を曲がったところでふと、違和感に気付いた。

（石畳の、道………？）

いつの間に道を間違えたのだろうか、地面がアスファルトから石畳へと変化していた。

「おっかしいな………石畳の道なんてあったか？」

これでも生まれてこのかた14年この町に住み続けている人間である。学区外ならいざ知らず、同じ町内で知らない場所はない。……はず。

くると踵を返し、俺はアスファルトの道に引き返そうとした。のだが。

「あ、れ……………」

歩いてきたアスファルトの道であった道、やはり石畳の道が続いていた。

ぐるり、とゆっくり首を回してあたりの建物を見て、俺は眉間にしわを寄せた。

「何、この洋風の町並みは……………」

たとえばレンガな建物とか。たとえばステンドガラスのはめられた建物とか。

一応言っておくが、この町はいまだ瓦屋根の家が多く残る田舎である。一軒だけならまだいい。だがこんなにたくさんの家が立ち並んでいる姿を見たことは、ない。

初めて。

初めて、自分の中に、言いようのない恐怖が込みあがってくるのを感じた。

「あー……どこに来ちまったんだ、俺」

わざと明るくそうつぶやく。

大丈夫。きつとすぐに知っている場所に出る。そう自分を励ましながら、一歩進むごとに積もっていくどうしようもない不安に押しつぶされそうになった。

進んでも、進んでも。一向にアスファルトはない。信号も、横断歩道もない。瓦屋根もなければブロック塀さえない。

「っ……………」

いつの間にかがたがたと震えていた足が崩れそうになり、あわてて踏ん張った。中二にもなって迷子になって腰が抜けたなんてしゃれにもならない。

薄闇の空を呆然と見上げる。

地上の俺をあざ笑うかのように、月は天上で輝いていた。

「んっ……………」

突然吹き込んできた風に、私は驚いて陳列棚から顔を上げた。
みれば、ドアの締りが悪かったらしく、半開きになったドアから風が吹き込んできていた。

隙間から見える外は、すでに暗い。自分がどれだけ熱中して商品を眺めていたかに気付き、真っ青になった。

「わ、やっちゃった……お母さん、怒ってないといいんだけどなあ……」

熱中しすぎて時間を忘れてしまうのは私の悪い癖だ。あわてていくつかの商品をつかむと、会計をして飛び出した。

薄闇に包まれた町並みは、一人で出歩くには少々心細い。ため息をつくと、私は闇から逃げるように駆け出そうとした、のだが。
ふと、道のだ真ん中にたたずむ少年に視線が行った。

短く切りそろえられた黒の髪に、同じように闇を映す黒の瞳。青いチェックのシャツをまるで上着のように羽織り、見慣れない装飾のついたズボンと靴を身に着けていた。

（変わった人……………異国の子かな）

つい、またボーっと少年の顔を見ていると、ぱっちり目が合ってしまった。

「……………」

「……はい？」

外国語だろうか、聞きなれない言葉で何か話しかけられた。

「……………」

「え、あ、ごめんなさい言葉がわかんないんだけど！」

「……………」

なんと言ったのかは分からないけれど、呆然とした顔からしてたぶん言葉が通じなくて絶望気味なんだろうと思う。顔色真っ青だし。そしてこっちの言葉も通じてないんだろうなあ、と理解しつつも。

「えっと、じろじろ見ちゃってごめんね！私急いでるから、また！」

「！？」

ごめん。なんかものすごく罪悪感を残しながら、私は家に飛んで帰った。

家に帰ると、やっぱり私の帰りを待っていたお母さんに怒られた。

「あんたねえ………またばけーっとしてたんでしょう。ほら、さっさと料理を運んで！」

「はーいっ！」

急いですでに完成していた料理を盛り付け、テーブルに並べる。すでにテーブルについていたお父さんが、私が配膳を追えるとともに声をかけてきた。

「今日はやけにボーっとしているな。何かあったか？」

「え？うーん、別に何かあったってわけじゃないんだけど」

お父さん越しに見えた窓の外の闇に、あの少年が脳裏に蘇った。不安そうに揺れていた、黒の瞳。

（大丈夫かな、あの子……………）

一度思い出してしまうと、なかなか思考の中から追い出してしまうことができなかった。

（迷子……………な年じゃないよね。でももしかしたらどこから逃げてきた移民だったり……………。親はいるのかな、寝るとこは……………というか言葉通じてるのかな）

心配しすぎにより食欲がうせてきて、私はもう自分の心に直球になることにした。

「ごめん、お母さん。出かけてくるっ！！」

「なっ……………サシエ！？」

後ろでお母さんが何か言っていたけれど、私の耳には入らなかった。

二（後書き）

一話ごとに視点が変わります。分かりにくいとは思いますが、序章が終わったから落ち着かせるつもりですので、お付き合いよろしくお願いします。

三

結局。

完全に日が暮れるまでふらついたが、見覚えのある風景を発見することはできなかった。

それどころか、まともな会話をできそうな人さえいない。

『……………』

一番最初に話した少女の言葉の意味は、まったく分からなかった。聞いたことすらない言葉に、こいつどこの人間だと凝視してしまっただけである。

だが、少女に逃げられてからしばらく、店の中や通行人の会話に耳を傾けて、日本語を話している人がまったくいないことに気付いた。よく見れば黒髪の間がほとんど存在せず、俺はすぐに誰かに道を聞くことをあきらめた。

（せめて、夜が明けるのを待とう……………）

明るくなれば、いつもの見慣れた風景に戻るはずだ。そう考えて、壁に寄りかかるようにずると座り込む。

ひんやりとした冷たい夜風が頬を撫ぜる。座り込んだとたん全身の熱が奪われたような気がして、俺は身震いをした。

知らない町。知らない人々。

もしここが異世界だとしても言うのなら、俺を助けてくれる人はいるのだろうか。

抱えたひざの上に額を乗せ、ゆっくりと瞼を閉じる。

「――？」

突然、頭上から声が降ってきた。

驚いて顔を上げれば、見覚えのある顔と出くわす。そう、不思議な言葉を話す少女だ。

「――？――、――……」

何かこちらに話しかけてきていたが、言葉が通じていないことは理解しているらしく、ほぼ独り言のようにぶつぶつと言っている。

「――」

すっと、少女の右手が差し出された。その意味が理解できず、少女の顔を見上げる。

透き通った蒼の瞳が、まっすぐに俺を見ていた。

なんとなく、その手の意味が分かった気がして。

俺は、少女の手をとった。

三（後書き）

ここからしばらくサシエのターンが続きます。

四

少年は、最初にあつた場所から少し東に進んだ路地に座り込んだ。
た。

現在季節は春先、少しは暖かくなつたとはいえこんなところに座り込んでいたらすぐに体を冷やしてしまう。

「大丈夫？」

声をかけると、少年は弾かれたように顔を上げた。

「帰る場所ないの？あーもー、なんでこんなところらふらしてんのよ。風邪引いても知らないからね」

通じていないことは知っているので、適当にまくし立てる。なんとなく通じる。

「行くところがないなら、うちに来なさいよ」

右手を少年に差し出すと、困ったように彼が私の顔を見る。

（……………捨てられた子犬かつ！！）

一瞬黒髪のところにとれた耳まで見えた気がした。しっかりした顔立ちのくせに何なんだこの破壊力。

「――」

やはり意味は分からない。でも、多分気持ちは通じたんだと思う。少年は、恐る恐るといった感じで私の差し出した手をとった。

「それじゃ、行こうか」

ぐいっと手を引っ張って歩き出す。

「――？――、――」

「どこに行くのかって聞きたいの？私の家よ」

やはり意味が通じなかったらしく、軽く肩をすくめて黙り込んでしまった。

大通りを抜けて、畑の広がる細い道に出る。少年は物珍しそうにきよろきよろと辺りを見回した。

「そついえばあなた、名前は？」

ふと、思い出してそう訊いた。

自分を指差して、「サシエ」と名乗る。そして手で少年を指し示し、「あなたは？」と訊いた。

「サシエ？」

「そつ、私はサシエ。あなたは？」

少年は軽く小首をかしげ、おずおずと名乗った。

「――、ケイ」

「ケイ？ケイって言うの？」

こくり、とうなずく。

「そっか、よろしくね、ケイ！」

にっこりと微笑めば、ケイも軽く笑った。

「――、サシエ」

四（後書き）

やっと主人公が名乗りました。苗字はまだですが。

というか、主人公話せないと動かしにくい上に性格が変わってくるよ……

ケイは、もっとツンデレですから！

えー、これからがんばります。

こんなところが読みにくい、などという意見をお待ちしています。

爽やかな朝だった。

体内時計に基づき、私の朝は日の出とともに始まる。

窓の向こうから太陽がゆっくりと顔を出すのを見ながら、私は大きく伸びをした。

「さーて、ケイは起きてるかしら」

多分起きてないだろうなあ、と思いつつ寝台から降りた。

昨日、ケイをつれて帰ってきた私を見たお母さんは、驚きつつもケイを泊めることを許可してくれた。現在彼は元兄のものであった部屋で眠っている。

ちよつとのぞいてみようと思つたとき、ケイの部屋から何かが転げ落ちる音がした。

「……ケイ？」

何があつたのかと部屋を覗き込むと、床に座り込んで頭を抑えているケイの姿。

「……」

こつちに気づいているのか気づいていないのか、きよろきよろと辺りを見回す。目は半開き。

「ケイ、おーい、ケイってば」

「……………」

誰？って感じの目。寝ぼけてるなこいつ。

「……………」

「……………」

ぱちぱち、と瞬きをするケイ。

「……………サシエ？」

「おはよ、ケイ」

私が笑いかけると、ケイはばつが悪そうに苦笑した。

いまだぼんやりしているケイを引っ張って、私は畑に出る。

「私は右側から水をまくから、ケイは左側をお願いね」

水場を指し、続いて畑の左のほうを指す。ケイは軽くうなずいた。
私が水をまく姿を見ながら、ケイも同じように水をまく。手際は悪いが。

（ケイって案外きれいな手をしてたし、もしかして他国の身分が高い人なのかしら）

うらやましいほど日焼けしていない白い肌、荒れていない手。あれは我ら平民ではまずありえない。

（黒髪といえば……南方諸国よね。も、もしや亡命してきた王子様とか！？……ってさすがにそれはないか。商人あたりの家の子だったのかなあ……でも、それならいろんな国の言葉を知っていてもおかしくないはず……）

南方諸国といえば、ここ最近は何勢も落ち着いているって聞いた気がする。ならば……やはり家の都合か。

「サシエ」

「どこかの良家の隠し子で、正妻に疎まれて国外逃亡……でも召使たちとはぐれちゃって、途方にくれてたのね、そうなのね！」

「サ、サシエ？」

今時の貴族の男はすぐに不倫するしね。うう、不憫だわケイ。

「大丈夫よ、必ずあなたを守ってあげるからね？」

「？」

ケイは、困ったように首をかしげ、手に持った桶を胸の辺りまで持ち上げた。

「ん、どうしたの？（はっ！き、貴族の子ならこんなことさせちゃだめじゃない！！）」

ケイは黙って畑を指す。

「ああ、終わったって言いたいよね」

私が思考を飛ばしている間に、いつの間にか畑に水がまき終わって

いた。

ケイはそばにおいてあった私の分の桶もつかむと、家のほうに向かって歩き出す。

「ケイ、桶私が持とうか？」

持ち手をつかんで持とうとすると、ケイは軽く振り返り首を横に振った。

うう、ごめんねえ……無理やり働かせちゃって。

一（後書き）

サシエの妄想が暴走。いや、頭から思い込んでいるわけじゃないとは思いますが。いつもより長めです。

家に帰るとすでにお母さんが朝食を作っていた。今日の朝ごはんはパンに溶かしチーズを乗せたものと、野菜のごった煮スープ。どれも近所からのおすそ分けだ。特にチーズはこの地方の特産品なのさ。

……と説明したいのに、通じないというのはちょっとさびしい。ちなみに、ケイは粗食ながらもとてもおいしそうに食べていました。また貴族説が薄れたなあ……。

朝食後はケイをつれて、また町に行くことにした。

「じゃ、いつてきまーす！」

「ああ、気をつけるんだよ」

昨日の夜のように、ケイを引っ張って道を歩く。ふと、ケイが肩をたたいた。

「どうしたの？」

ケイは手に手帳と変わった形の棒を持っていた。あの持ち方、もしかして書くものなのかな。そういえばケイ、かばんを持ってたっけ。

ケイはぐいっと真上を指差し、続いて口パクをした。

「空がどうしたの？」

「空？どうした？」

ああ、お母さんの名前を紹介したときと同じだ。
つまり、空をなんというか聞いているわけだ。

はつきりと「空」と答えると、納得したようにうなずいて手帳に何かを書き込んだ。覗き込んでみたけど、知らない文字だった。

というかそもそも、私は読み書きはできない。読み書きができるのは、学問を学ぶだけの財政的余裕のある者のみ。

……ますますなぞな少年だな、ケイ。

書き込み終わったケイは、今度は下を指した。これは「道」か？「地面」か？

迷った末、まず真下を指して「地面」と言う。

「地面、地面、地面」

ぐるり、と周りの畑やあぜ道、とにかく下をぐるーりと指してみる。

んで、も一度道を指して。

「道」

ケイは眉間にしわを寄せ、道から少し外れた斜面に手をつく。

「地面？」

「地面」

戻ってきて、道に手をつく。

「道？」
「道」

ふむ、ものわかりがいいじゃないか。

ふと、一番覚えるべき単語があつたなあ、と思い出す。マルとバツ
ではい、いいえは全国共通なのかな。

書き終わったケイに、片手で丸を作ってみた。

「はい」

んでバツを作る。

「いいえ」

ケイ、ちよつと考え込んだ。自分を指差し、「ケイ？」と聞く。

「はい」

今度は私を指す。

「サシエ？」

「はい」

今度、空を指す。

「地面？」

「いいえ」

ケイは軽くうなずくと、またメモを取る。

なんだろう、別にたいしたことじゃないのに面白くなってきたよ。

町に着くまで、私たちは歩きながらずっと単語確認を続けていた。

三

ケイは、困っていた。

普通に挨拶したはずの相手がなぜ、引きつった笑みを浮かべながら胸元をつかみあげてきているのか。

こちらに名前を紹介してくれたサシエがなぜ、肩を震わせて大爆笑しているのか。

「さ、サシエー……？」

助けを求めるように視線を向けると、またぶつ、っと笑った。だからなんなんだ。

目の前の青年も、そんなサシエを横目に見るとこちらをつかんでいた手を離し、サシエの頭をはたいた。

「は、はははははははっ！……！お、お腹いたいっ！！」

「お前な………そうか、お前の差し金だな？ そうなんだな！？」

「し、しーらない！！はははっ！！！」

私は痙攣しそうな腹を抱えて、幼馴染を見上げた。

彼はディオルト。通称ディー。私と同一年で鍛冶になることが将来の夢だという。

「さあ吐け。お前こいつにどれだけ人のこつぱずかしい秘密をしゃべったんだ？ん？」

「ははは、だいじょーぶだいじょーぶ。ケイはね、言葉がわかんないんだって」

「んじゃさっきの無駄に発音のいい悪口はなんだったんだ！！？？」
「え、名前として教えたただだよ？」

町にたどり着いてすぐ、ケイと私はディーの姿を見つけた。
なので、彼を指してちゃんとな名前を教えてあげたのだ。

「北斗七星ハゲと」

「名前じゃないよなそれは！！古傷えぐりだよな！？」

あああああとディーがかきむしるそのふつさふさの髪を刈り取ると、なんとなく北斗七星に見えなくなないハゲの群像が出てきます。
昔の古傷なんだよ。

「よろしく、北斗七星ハゲ」と挨拶されたディーの表情といたら……
あーあははははっ

「あー、おもしろかった」

「謝れ！俺とあいつに謝れ！」

「ごめんね、ケイ。おかげで面白いものが見れたわ」

「俺にもだー！！」

「ケイ、彼はディオルト。ディーって呼んであげて」

とりあえず、ここは訂正すべきだよな。これ以上ケイを巻き込むと
かわいそうだし。

「ディオルト？北斗……」

「ディオルトだ」

ふてくされた顔でディーが言う。ケイは眉を八の字にしていたが、
「よろしく、ディオルト」といった。

「つつーか、よろしくは分かるのか？」

「何度か挨拶したからね、なんとなく覚えたみたい」

あつそ、と言つてディーはケイに向き直った。

「お前、名前は？」

「――？――、ケイ」

「ふうん。よろしくな、ケイ」

二人の表情は、いろいろとあいまいな苦笑だった。

「ごめんなさい、第一印象を壊させたのは私ですなはい。」

三（後書き）

デイーが入ると動かしやすいww

ケイよりもデイーのほうが絡めやすいですからね。

デイーは昔かなりのやんちゃだったと思われます。というかそんなにたくさん怪我して頭が無事なのが不思議ですけど、そこは追求しないことにしてくださいね。

四

「で、結局こいつは何者なんだ？」

立ち話もなんだから、とディーの家（町長宅。うちと比べ物にならないほどでかい）に移動して、見慣れたディーの部屋のソファーに腰を下ろす。

今までずっと気になっていたらしいディーは、開口一番そう訊いてきた。

「ん、拾った」

「省きすぎだ。一から十まですべて話せ」

「そういわれても、私ケイのことあんま知らないんだよねー」

とにかく話せないため、私が持っている情報はほとんどない。なので推測を交えて、ケイを拾った経緯、印象などを語った。

「……謎ばかりだな」

「そうなんだよ」

自然と、私達の視線は所在無さに立っているケイに移る。

「……………？」

視線を戻す。

「……………少なくともこの国の人間ではないな」

「うん、そう思う」

そこで沈黙。

……情報が少なすぎて、これ以上この話題について触れても意味がない。

「ねえ、どうしたらいいと思う?」

「いや、んなこと訊かれてもな……何か知ってる人がいるといいんだが。……待て、黒髪黒目って聞き覚えが……」

猫っ毛な赤茶の髪を掻きながら、ディーは眉間にしわを寄せた。

「黒、黒……何だったかな、つい最近誰かが……いや昔か?……ん、何だうるさいな」

ばたばたと、誰かが大きな音を立ててこちらへやってきた。

「兄さんっ!お客さんが来たって?あ、なんだサシエと……」

飛び込んできたのは、ディーの一歳下の妹のラナ。彼女はぐるりと部屋の中を見渡し、ケイのところまでぴたりととまった。

「……ひゃー、かっこいいわねこの人!サシエ、どこで捕まえてきたのよ」

「大通りに落ちてたのよ。昨日拾ったばかり」

「ええええ!!私も昨日行ったのに……うらやましいっ!」

ラナがそう言って笑う。

「ええいうるさいっ！！ラナ、ケイを持って行っていいからでけっ！！」

ディーがうつとうしげに叫ぶ。彼は思い出せないことがあるのがとても嫌いな性格だ。

だがしかし。

「いやそれはだめだから！ケイ……っでもういないし！！」

連れて行かれてしまった！あわてて追いかけようとした私の腕を、ディーがつかむ。

「少し黙ってろ、あと少し……あと少しでなんか出てきそうだから」

「でもケイが……」

「ラナに任せとけば何とかなるだろ……ああくそ忘れちゃったじゃねーか！！」

結局、それから小一時間悩み続けたディーは、何一つ思い出すことができなかった。

「くそ、もやもやするな……余計なことばかり思い出して必要なことが思い出せない」

「ええと、ごめんね？悩ませちゃって」

私が謝ると、ディーは頭を抱えながらも思い出した「余計なこと」を呟いた。

「父さんから聞いた話だが……トラヴィスがこちらに戻ってくるぞうだ。もしかしたらお前の家にも寄るかもしれないぞ」

「え、お兄ちゃんが帰ってくるの？初耳なんだけど……」

トラヴィスお兄ちゃんは、私の4歳年上の兄。現在はこのあたりの領主、ブラッドフォード伯爵の屋敷で兵士として働いている。

「あまり詳しく聞かなかったから細かいことは分からない……悪いな」

「うっん、いいのいいの。ありがとね」

遠くからラナの声が聞こえる。どうやら戻ってきたらしい。

「それじゃ、今日はそろそろ帰るわ」

「ああ。気をつけて」

いまだ晴れない顔をしているディーに見送られ、私は部屋を出た。

四（後書き）

間が空いてすみません！テンション復活です！

ネタが浮かんだため結構話の筋をいじったものの、行き当たりばつ
たりの割にはちよつと引き締まったかな……

三章書き終わったら手直しをしようと思います。

五

言葉というものは、本当に偉大だ。

当たり前すぎていた日常が、言葉がないだけで異質なものになる。

サシエ達が何かを話しているのを聞きながら、俺は壁にもたれかかった。

ディオルトという青年は、サシエとともに仲がいいことが会話から分かる。意味は分からなくても、雰囲気で分かるものだ。

彼と話しているサシエは、とても明るい。俺を励ますための笑顔とは違う、心からの笑みを浮かべている。

それだけ、心を許している存在なのだろう。それが、少し羨ましい。

言葉が通じない俺は、あの中に入ることはできない。

言葉という、とても厚い壁。

彼らにばれないように小さくため息をついたとき、一人の少女が部屋の中に飛び込んできた。

「……………」

ディオルトと同じ軽くウェーブのかかった柔らかな赤茶の髪に、くりくりとした金茶の瞳。きっとディオルトの姉妹なのだろう。

ただなぜこちらを凝視しているのかが分からない。やっぱり俺はこの空間の中で異質な存在なのか。

対応に困っていると、少女が何か叫んだ。恐怖の類ではなく、いわゆる黄色い悲鳴。

……………まさかこれ、対象は俺か。

しかもサシエまで乗ったらしく、きゃぴきゃぴと数段高い少々耳障りな声が響く。頭を抱えていたディオルトが、きつと眉を吊り上げて二人に怒鳴りつけた。

再び、言葉が分からないということを憎たらしく感じたのはこのときである。

少女にがしつと腕をつかまれ、そのまま疾風のごとく部屋を後にする。どうしてこうなった。状況がつかめないため、下手に抵抗できず少女に引っ張られるがままになる。

そのまま、否応なしに商店街まで引きずられていった。

少女はとてもよくしゃべりかけてきたため、俺は分かる範囲の単語を聞き取り、適当に相槌を打つのが精一杯だった。

「……………」

「あ、え？ごめん分からないんだけど」

相槌にすらなっていない気がするが、これが精一杯である。

その上人が多いため、声も聞き取りにくい。ついそちらに意識を

向けていた俺は、斜め前方からかけてくる青年に気付かなかった。

「っ！？」

「っと、ごめん！」

ぶつかられてわずかによろめいた俺に、青年はそう言い、だが急いでいたためなのか止まりもせず、駆けて行ってしまった。

こういう場合、スリなパターンが多そうな気がしたが、そもそも盗られる物がないので別になんとも……

そこで、はたと気付く。

（あいつ、ごめんって……！？）

それは、確かに日本語であつたはずだ。俺に言語翻訳能力は備え付けられていないのだから。

あわてて振り返り、青年の姿を探す。だが、もう青年の姿はどこにもない。

「……………」

見失ってしまった悔しさを感じながらも、わずかな希望が俺の中で生まれた。

五（後書き）

ラナと一緒にいるのにラナが影。言葉の壁は厚いようです。

番外 深い闇と生きる者

ばんつ、と扉を半ば蹴破るようにして、黒髪の青年がその建物の中に飛び込んだ。

「魔術の資料が届いたって!？」

『お前な、もーちつと落ち着いて入ってこれないのかよ。ドアの修理代慰謝料上乘せして請求書送りつけんぞゴルア』

中にいた金髪の男性が、手に持っていた資料を机に置きながらギロリとにらむ。

『え、やだよそれは。僕万年貧乏だし。で、で?どれ資料って』

『ああ、これだ』

まるで新しいおもちゃを手に入れたかのようなその表情の青年に、男性は苦笑する。

『実際には魔術じゃないな、魔術を専門にしていた王国があったとかそう言う類の資料だ。よくまあ、こんなものが生き残ってたよな』

『魔術を専門につて……それってフ、フィル……とかいう古代大国の資料?魔術じゃなくて!?!』

『残念ながら。ただの歴代記だ』

『なっ、そ、それはないだろう?!?僕がどれだけ苦労して追っ手の間をかいぐりここに来たと思ってんのさあああああ』

男性は肩をすくめる。

『しょうがないだろう。お前に連絡したときはまだ解読途中だった

んだ」

「うそだあ……僕の苦勞何ナノ。泣くよ？泣いちゃうよ僕」

『聞こえん。その「ニホンゴ」とやらで話すな』

『……ふんっ、いいよ。まだまだ資料は送られてきてるんだろ？全部翻訳し終えるまでここにいる』

青年がすねたようにそう言うと、男が眼を剥いた。

『ふっざけるな！！おまつ、俺にどれだけ迷惑かけるか分かって言ってるかそれ！！怒られるのは俺なんだぞ！！』

『苦勞しちやえばいいじゃんか。そして禿げちゃえ』

『~~~~~っ！！！！！』

青年は笑っていた。

その黒い瞳に誰よりも深い失望を浮かべながら、笑っていた。

今日で、ここにやってきてから一週間になる。本当はちゃんと日にちもつきたいが、残念ながら分らないため日数でつけることにした。このノートが尽きるまでには日にちが訊ける様になりた
い。

ただのホームステイであればそろそろ何時でもいい頃だと思うが、俺は相変わらず、サシエやその家族に実に迷惑をかけながら暮らしている。

主に一日中農作業や家畜の世話、家事などの手伝いをしていたのだが、いかんせん科学技術の発達した元の世界とこちらとではやること成す事規模が違う。料理に火起こしから始める家庭が二十一世紀の日本のどこにあるというのだろうか。俺は見事な足手まといである。

しょうがないため、俺はまず体力作りから取り組みたいと思う。

……とはいえ、特別なことはしていない。情けないものとする余裕がない。サシエと共に仕事をこなすだけで筋肉痛だ。結局思っているだけだ。

その代わり、覚えた単語は増えた。これもサシエが根気強く俺に説明をしてくれるおかげだ。ジェスチャー交じりの会話に聞き取れる単語が増えるとても嬉しい。

……ああ、サシエといえ、ここ最近やけに落ち着きがない。

サシエだけではなく、フライ小父さんやフィオナ小母さん（サシエの両親だ）も少々浮き足立っている気がする。

警戒しているようなものではなくて、むしろ待ちわびているような。
な。

ああ、こんなとき言葉が話せないことが

そこまで書いて、俺はため息をついた。

「やっぱり言葉の壁は厚いんだよなあ……」

毎日、毎日、日記の中にひとつふたつ『言葉が話せないことが不便だ』と書き連ねかける。いい加減この言葉も言い飽きた。

ばたん、とノートを閉じてベッドに倒れこむ。下手に悩んでから書き直すのは文房具の無駄だ。この世界には消しゴムもシャープンも売っていないのだから、使い終わったらそれで終わり。

ふかふか、とはいいがたいもののアルプスの某少女さながらのわらのベッドはなかなか香りがよかった。そのまま目を閉じる。

「……………って、寝るな俺。起きろ俺。何居候の癖に二度寝しかけてんだおい」

自分で突っ込んだ。

現在は空が白む程度の時刻、朝だ。夜は夕食と共に倒れこむように寝てしまったため、日記を書く余裕もない。

自分を奮い立たせて部屋を出ると、ちょうど隣の部屋から出てきたサシエと顔をあわせた。

「デイーサイ、サシエ」

「デイーサイ！——ファン？」

「え、ああ、寝れた寝れた。ファンファン」

俺の返答に、サシエも柔らかな笑顔を浮かべた。

ここ七日で思ったこと。サシエは凡庸美人だ。

際立った美しさというものはないものの、しぐさや声、すべてがとてもかわいらしい。おまけに明るく性格もよく面倒見がよいとまできたらもう完璧だ。これが現代であつたなら、かなりもてる女子生徒になっていただろう。

という素直な感想を口に出そうと思ったがやめた。通じないし。とりあえず俺はせかせかと行動を開始したサシエの後にくっついて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169v/>

月夜の詩

2012年1月5日22時51分発行